

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02340

研究課題名(和文)『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究

研究課題名(英文) Research on the Making of Spoken Language Map and Language Change Based on the Follow-up Survey of "Linguistics Atlas of the Seto Inland Sea"

研究代表者

友定 賢治 (TOMOSADA, KENJI)

県立広島大学・保健福祉学部(三原キャンパス)・名誉教授

研究者番号：80101632

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、藤原与一(1974)『瀬戸内海言語図巻』(上下2巻 東京大学出版会)の追跡調査を、3つの目的で行った。(1)音声言語地図による瀬戸内海域方言音声の保存については、約100地点の音声データが得られ、その切り出しをすすめている。(2)実時間言語変化の解明と言語地図分布解釈に関しては、西日本豪雨、新型コロナウイルス感染拡大、島嶼部の人口減などの理由で、120地点ほどしかできなかったため、地図を作成できていない。(3)『瀬戸内海言語図巻』の少年層話者(女子中学生)のその後の言語習得については、大分県姫島、愛媛県中島、広島県大崎上島での結果をまとめた。特に注目したいのが、方言の習得である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)音声言語地図の作成は、人口減などで危機言語化しつつある瀬戸内海島嶼部方言の記録保存として貴重なものとする。(2)『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査は、当該地域方言の実時間変化を明らかにするものであり、言語地理学の新たな展開を示すものである。(3)言語形成期以後の言語習得は、未開拓の研究分野であり、『瀬戸内海言語図巻』の少年層話者の約50年後の再調査によって、ケーススタディーとしてではなく、一般化できる結果になることで、言語習得理論にも影響を与えるものである。

研究成果の概要(英文)：This study is a follow-up survey of "Linguistic Atlas of Seto Inland Sea" (Tokyo University Press) by Fujiwara Yoichi (1974) for 3 purposes. (1) Regarding the protection of Seto Inland spoken dialect based on Spoken Language map - Approximately 100 points of voice data is obtained and is recommended to be cut out. (2) Regarding the elucidation of real-time language change and interpretation of linguistic map distribution. Due to heavy rains in West Japan, COVID-19, and population declining in the island, only 120 points approximately could be made. Hence, the map could not be created. (3) Regarding the subsequent language acquisition of the youth class speakers (girls junior high school) in "Linguistics Atlas of the Seto Inland Sea". The results of Himeshima, Oita Prefecture, Nakajima, Ehime Prefecture, and Osakikamijima, Hiroshima Prefecture are summarized. Particular interest was paid to the acquisition of dialects.

研究分野：日本語学・方言学

キーワード：瀬戸内海言語図巻 経年変化 言語形成期以後の言語習得 音声言語地図 言語変化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本の方言研究において、1970年代、言語地理学がさかんになり、『日本言語地図』(大蔵省印刷局 1966-1974)『方言文法全国地図』(財務省印刷局 1989-2006)をはじめとして、多くの言語地図が作成された。言語地図解釈の理論化も、柴田武『言語地理学の方法』(筑摩書房 1969)、馬瀬良雄『言語地理学研究』(桜楓社 1992)などですすんだ。

しかし、1980年代、社会言語学的な方言研究が盛んになるとともに、言語地理学は下火になった。言語地図を利用する研究が展開せず、研究が個々の地図の分布解釈に限られ、発展性が見いだせなかったことも理由の一つであろう。その中で、言語地図の追跡調査により、実時間での言語変容をさぐる試みがなされている。大西拓一郎は、所属先の国立国語研究所で行ったプロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」ならびに基盤研究(A)「方言分布変化の詳細解明 変動実態の把握と理論の検証・構築」で、『日本言語地図』『方言文法全国地図』などの項目を全国で再調査して、新たな地図を作成した。これによって、言語変容理論や分布解釈理論などの議論が高まり、ふたたび言語地理学に注目が集まっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、次の3つの目的を設定している。

音声言語地図による瀬戸内海域方言の音声保存を行う。人口減などで危機言語化しつつ方言の記録保存として有意義であると考え。

『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査によって、当該地域の言語変容を明らかにする。全国規模の追跡調査研究は、上記のとおり大西拓一郎のものがあるが、全国が対象ゆえに、当該地域での調査地点数は限定され、調査項目も瀬戸内海域社会に即したものとは言えない。一方、瀬戸内海域を対象とした追跡調査も、室山敏昭・藤原与一編(1999)『瀬戸内海圏環境言語学』は調査地点が限られ、岸江信介、峪口有香子、友定賢治も実施しているが、通信調査であったり、個人の変化を目的としたものである。本研究は、『瀬戸内海言語図巻』に準拠して、瀬戸内海域全域で実施する初めての追跡調査であるだけでなく、広域を対象とした言語地図の詳細な追跡調査としても初めてのものである。

『瀬戸内海言語図巻』の少年層話者(女子中学生)だった話者に調査し、言語形成期以後の言語習得を明らかにする。個人の言語習得研究は、いわゆる「言語形成期」まででとどまっており、その後、地域で生活していく中で、どのように言語を習得して行くかは、縦断的研究の困難さもあり、未開拓のままである。本研究によって、少年層話者であった女子中学生が、その地で約60年の間に、どのように言語習得したかが明らかになり、言語習得理論に資する点が大きい。

## 3. 研究の方法

上記のように、1970年代に盛んだった言語地理学的研究は、地図にとどまり、研究の展開が十分でなかった。本研究は、『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査を通じて、瀬戸内海域の実時間変化を明らかにすることと、方言音声の記録保存、少年層話者の追跡調査によって、言語形成期以後の言語習得を明らかにするものである。幸い、『瀬戸内海言語図巻』の調査項目、調査法、話者氏名等は、すべて、藤原与一(1976)『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』(東京大学出版会)に明記されており、極力、それに準拠した方法で、次のような調査を研究期間内で行うよう計画した。

- ・瀬戸内海島嶼部と沿岸部を合わせて、研究期間内に 300 地点で追跡調査をする。
- ・各地点で、『瀬戸内海言語図巻』同様に老年層話者(60代～70代女性)一人を調査する。その際、『瀬戸内海言語図巻』の少年層話者であった方を話者とするよう努める。
- ・『瀬戸内海言語図巻』の音声項目を中心に音声収録し、音声言語地図によって、方言の記録保存に資する。

#### 4. 研究成果

上記のように、本研究は、瀬戸内海島嶼部を中心とした 300 地点で、70 代ネイティブの女性を対象とした調査を実施し、そのデータによって作成する言語地図と『瀬戸内海言語図巻』を比較して、言語変化を考えるものである。ところが、研究期間中(2017～2020)、2018年の西日本豪雨で調査対象地域の広い範囲で被害があり、調査が出来なかった。そして、2020年3月からは新型コロナの感染拡大でまったく調査は出来ない状態にあった。また、瀬戸内海島嶼部の人口減少は激しく、条件にあう話者がいない地点が多くなっていった。

このような状況のため、調査出来た地点が、予定の半分ほどの 120 地点で、言語地図を作成できるところまでは至っていない。そのため、同一テーマで研究を継続することにしている(基盤研究 B 21H00530 2021～2024)。

上記のような状況の中で、3つの研究目的に関して、どのような成果が得られたかを述べる。繰り返しになるが、本研究は予定調査地点の調査を実施して、言語地図を作成してからの考察が中心となるものである。コロナ禍などで調査ができず、地図作成には至っておらず、研究成果も限定される。

##### 音声言語地図による危機言語の音声保存

これは、人口減等によって危機言語化が進行しつつある、特に島嶼部方言音声の記録保存が目的であり、調査済み 120 地点ほどの音声切りだしを進めているところである。地図作成には至っていない。新科研(21H00530)で継続して調査し、地点数を増やす予定である。

現在の調査からも、連母音の融合、助詞「へ」「は」「を」の前接音節との融合などは、『瀬戸内海言語図巻』と大きな変化はなく、現在も使用されている。香川県志々島では合拗音「クワ(kwa)」が用いられているなどの成果は得られている。

##### 『瀬戸内海言語図巻』に準拠して、瀬戸内海域全域で実施する初めての追跡調査

言語地図が完成してから、『瀬戸内海言語図巻』と比較して考察することになるものなので、現在 120 地点ほどの調査では言語地図を作成しても言語変化を論じるのは難しい。やはり、新科研(21H00530)で調査地点を増やし、当初の目的に達したい。

現在の調査からも、共通語化が進む一方で、方言を使用するようになる項目もある、『瀬戸内海現図巻』にみられる俚言が、今の話者(70代女性)のにとっては、古い言葉として理解語彙ではあるが、使用することはないというものが多くといった成果は得られている。

##### 少年層話者であった女子中学生の、その後約 60 年間の言語習得

ケーススタディー的な考察が可能な研究目的であり、松田・塩川・岩城の国際学会での発表や松田・塩川(2019)の論文などを発表した。新科研(21H00530)では、言語形成期以後の言語習得で、一般化できることは何かを明らかにしたい。

現在までに、共通語化がすすんでいること、一方で、共通語から方言に変化するものが一定程度(まだ具体的な数値では示せない)認められるのは注目すべきであるなどが成果として明らかになっている。

引用文献

松田美香、塩川菜々美、大分県国東郡姫島村方言における 56 年間の言語変化：同一話者  
への追跡調査から、別府大学紀要、60 号、2019、15 - 29

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 友定賢治	4. 巻 5号
2. 論文標題 感動詞の変化研究とその課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本方言研究会編『方言の研究』	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田美香・塩川奈々美	4. 巻 60号
2. 論文標題 大分県東国東郡姫島村方言における56年間の言語変化 同一話者への追跡調査結果から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『別府大学紀要』	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 IWAKI Hiroyuki, MATSUDA Mika, SIOKAWA Nanami, TOMOSADA Kenji
2. 発表標題 Study of language change by follow-up survey of "The Linguistics Atlas of the Seto Inland Sea(LAS)
3. 学会等名 International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松田 美香  (MATSUDA MIKA)  (00300492)	別府大学・文学部・教授    (37502)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村上 敬一 (MURAKAMI KEIICHI) (10305401)	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・教授  (16101)	
研究分担者	峪口 有香子 (SAKOGUCHI YUKAKO) (10803629)	四国大学・地域教育・連携センター・講師  (36101)	
研究分担者	酒井 雅史 (SAKAI MASASHI) (20823777)	甲南女子大学・文学部・講師  (34507)	
研究分担者	大西 拓一郎 (OONISHI TAKUICHIROU) (30213797)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・教授  (62618)	
研究分担者	脇 忠幸 (WAKI TADAYUKI) (50709805)	福山大学・人間文化学部・准教授  (35409)	
研究分担者	灰谷 謙二 (HAITANI KENJI) (60279065)	尾道市立大学・芸術文化学部・教授  (25405)	
研究分担者	小西 いずみ (KONISHI IZUMI) (60315736)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授  (12601)	
研究分担者	又吉 里美 (MATAYOSHI SATOMI) (60513364)	岡山大学・教育学研究科・准教授  (15301)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小川 俊輔 (OGAWA SHUNSUKE) (70509158)	県立広島大学・人間文化学部・准教授  (25406)	
研究分担者	岩城 裕之 (IWAKI HIROYUKI) (80390441)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授  (16401)	
研究分担者	有元 光彦 (ARIMOTO MITSUHIKO) (90232074)	山口大学・国際総合科学部・教授  (15501)	
研究分担者	岸江 信介 (KISIE SHINSUKE) (90271460)	奈良大学・文学部・教授  (34603)	
研究分担者	中東 靖恵 (NAKATOU YASUE) (90314658)	岡山大学・社会文化科学研究科・准教授  (15301)	
研究分担者	森 勇太 (MORI YUUTA) (90709073)	関西大学・文学部・准教授  (34416)	
研究分担者	塩川 奈々美 (SIOKAWA NANAMI) (10882384)	徳島大学・高等教育研究センター・助教  (16101)	
研究分担者	重野 裕美 (SHIGENO HIROMI) (70621605)	広島経済大学・経済学部・准教授  (35402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------